

# ブラームス: 2つのクラリネットソナタ 作品120

Johannes Brahms:

Zwei Sonaten für Klarinette und Klavier

op.120

H. S.

2017.06.19-

# 目次

第1章	作曲に関する経緯	3
1.1	背景と作曲過程	3
1.2	初演と出版	3
第2章	クラリネットソナタ第1番	4
2.1	全体の構造	4
2.2	第1楽章	4
2.3	第2楽章	4
2.4	第3楽章	4
2.5	第4楽章	4
第3章	クラリネットソナタ第2番	5
3.1	第1楽章: Allegro amabile	5
3.2	第2楽章	6
3.3	第3楽章	6
参考文献		7

## 第1章

# 作曲に関する経緯

### 1.1 背景と作曲過程

Brahms が晩年の室内楽分野における傑作、クラリネット三重奏曲とクラリネット五重奏曲を作曲したのは1891年で、これはマイニンゲン宮廷管弦楽団の首席クラリネット奏者 Richard Mühlfeld の演奏に触発されたものであることは広く知られている。その後 Brahms はピアノのための小品 (作品 116 から 119) に重点を移しているが、クラリネットとピアノのための作品というアイディアは持っていたことが Ferdinand Schumann の回想で伝わっている [1]。このアイディアが実現するのは 1894 年、Brahms はイシュル滞在中の 7 月に 2 曲のクラリネットソナタを平行して作曲している [2]。ただしイシュルに行く前にこの曲のスケッチを残している [1]。

この時期の Brahms の周辺は栄光と親しい友人との死別で彩られている。1892 年には Elisabeth von Herzogenberg が 1 月 7 日に亡くなっているし、1893 年 2 月 26 日に女性歌手だった Hermine Spies が急逝している。1894 年の 2 月 6 日には Theodor Billroth、2 月 12 日には Hans von Bülow と立て続けに二人の親友が亡くなり、さらに 4 月 13 日には Philipp Spitta が亡くなっている。一方で Brahms の名声は頂点にあり、1893 年の 60 歳の誕生日に際して大規模な祝典が企画されたが、Brahms はこれを辞退して Widmann や Hanslick 夫妻とイタリア旅行へ出かけている<sup>\*1</sup>。また、若い頃に渴望していた地位であるハンブルク市のフィルハーモニー協会音楽監督への就任依頼が 1894 年 4 月に届く。これらの体験は「枯淡の境地」と呼ばれる後期ピアノ曲集に反映されていると考えられている。それに対して、作品 120 はそれを突き抜けたシンプルさ、明るさが特徴的である。どちらのソナタも、Mozart や Mendelssohn を思わせる明快さ、そして洗練された作曲技法を備えている。主題展開に関しても、以前のような変奏の技法を駆使するよりも、比較的原型を留めたままの形でごくわずかな変更で絶妙なニュアンスを出す方向へと舵を切っている。これらの傾向は 1996 年の 4 つの厳粛な歌 op.121 でさらに推し進められることになる。

### 1.2 初演と出版

初演に先立つ 1894 年 9 月 23 日に、ベルヒテスガーデンにてマイニンゲン公爵らの立ち合いのもと、Brahms は Mühlfeld とこの 2 曲のソナタを試演している [2]。続いて 11 月には Clara Schumann, Joseph Joachim の前でも演奏している [4]。公開初演はウィーンの楽友協会にて、第 2 番が 1895 年 1 月 8 日、第 1 番が 1 月 11 日に行われた<sup>\*2</sup>[1]。恒例の演奏旅行がその後に続き、3 月までにベルリン、ライプツィヒ、フランクフルト、メルゼブルク、マイニンゲンで演奏している [2]。

出版は 1895 年 6 月、Simrock 社から。同時に Brahms 自身によるヴィオラ譜、またヴァイオリンとピアノのための編曲版も出版された [5]。Brahms は後者の版についてはピアノパートにも手を入れている。

<sup>\*1</sup> 回想録集第 3 冊 p.140-145 に記述あり。

<sup>\*2</sup> そのリハーサルに関する記述が回想録集第 2 巻 p.123 にある。

## 第2章

# クラリネットソナタ第1番

2.1 全体の構造

2.2 第1楽章

2.3 第2楽章

2.4 第3楽章

2.5 第4楽章

## 第3章

# クラリネットソナタ第2番

### 3.1 第1楽章: Allegro amabile

提示部 E			展開部 D			再現部 R			コーダ C
1-55			56-102			103-149			150-173
E <sub>1</sub>	E <sub>2</sub>	E <sub>c</sub>	D <sub>1</sub>	D <sub>2</sub>	D <sub>3</sub>	R <sub>1</sub>	R <sub>2</sub>	R <sub>c</sub>	
1-	22-	40-	56-	73-	88-	103-	120-	138-	
Es	B	B	Es-g	G	B	Es	Es	Es	E-Es

表 1: 第 1 楽章の構成

典型的なソナタ形式の楽章だが, **Brahms** のどのソナタ楽章と比較しても形式的明瞭さが顕著である. 変ホ長調, 4分の4拍子.

譜例 1: 第 2 番第 1 楽章冒頭. クラリネットは B 管だがここでは実音表記.

序をおかずクラリネットによる第 1 主題の提示から始まる (譜例 1).

譜例 2: 第 2 番第 1 楽章第 22 小節から.



譜例 3: 第2番第1楽章第40小節から.

### 3.2 第2楽章

### 3.3 第3楽章

## 参考文献

- [1] 「作曲家別名曲解説ライブラリー ブラームス」音楽之友社 (1993)
- [2] 西原 稔 「作曲家 人と作品シリーズ ブラームス」音楽之友社 (2006)
- [3] 「ブラームス回想録集」全三巻, 音楽之友社 (2004)
- [4] 楽譜 G. Henle Verlag 版
- [5] IMSLP (第 1 番, 第 2 番)